

のための教育、ということではなかったかという気がします。1952（昭和27）年には、経団連が教育制度改正に関する答申を出して、その中できちんと知識を詰め込んでいくことが必要だということが明らかに書かれております。1960（昭和35）年には、経済審議会で「経済発展における人的能力開発の課題と対策」という画期的な答申が出ております。これは非常に有名になった答申で皆さんもご存知だと思いますが、3～5%をハイ・タレントとして養成するということが堂々と書かれております。教育の機会均等という社会正義的な理由も実は母集団を増やそうということなんですね。それによって有用な知的労働者を増やすこと、そして自分から考えるというよりもむしろ知識をどんどん詰め込んでほしいということです。その中から、ハイ・タレントを出していこう、母集団を2倍にすればハイ・タレントの数も2倍になるということですね。

この1952年と1960年の経団連あるいは経済界からの諮問というのは、その後の日本の教育審議会において大々的に取り入れられて、ほとんどこれがその後の教育の主軸になってきたという事実を否定できないと思います。それから1998（平成10）年の中央教育審議会答申もある意味では画期的な答申で、21世紀に必要な教育の模索ということです。そこから「ゆとり」という言葉も出てきたのでしょ。今までの知識の詰め込みに対する反省から出てきたと思われませんが、これについてどう評価したらいいかはもう少し時間が経たないとわからないと思います。

このように、教育は国家的意図だと否定的に捉えてしまいますと、そのなかで教育を受けてきた私自身をも否定することになりますから、これは否定するわけにはいきません。ある意味では一生やむを得ない事情であると考えた方が良いのかもしれない。ただ、これからどうするかと考えると、私は1998年の答申と同じ意見です。やはり先ほどから出ておりますように、受け身の教育ではなくて能動的な教育でありまして、今後はこれが重要だということです。現在の受験状況ではそれは大変難しいとは思いますが、その部分を可能なかぎり高校の授業の中に取り入れていくことができないか、それによって思考力を増し、同時に能動的な教育を実践し、それによって大学に入ってくる学生が能動的になり、自転車の乗り方を知っている学生が自分自身で学力をきちんと使えるようになることを期待します。以上です。

司会（村上） ありがとうございます。前の4人の先生方に話していただいた問題を大きく戦後の歴史の中で捉えなおしていただきました。「知識」の教育から「知」の学習へという点を強調されたように思います。それでは次に附属学校の丸山先生をお願いします。

指定討論2 「高大連携のカリキュラムづくり」

丸 山 豊（附属高校副校長）

実践の現場から 先生方の話をお聴きしていて、中等教育の現場にいる者として針のむしろに立たされているような感じがします。指定討論者として特に準備はしていませんが、中・高等学校で社会科（歴史）を担当している者としていくつか感想を申し上げます。

低学力の問題が大きな話題になっていますが、これも難しいところがありまして、やはり高大の連携が本当に重要だと改めて思いました。大学の求める「知」というもの、学問の本当の美しさとか楽しさなど、高校の現場からするとドキッとするような発言の中で、特に周藤先生が言われた、歴史教育を否定するところから歴史学が始まるという点は歴史の教員として衝撃的ですね。

我々が抱えている問題は、高校のカリキュラムを新しく作っていかうと思っても、実は大学のプレッシャーで身動きがとれなくなっているのが現状だろうと思います。特に学校五日制の中で、しかも30単位という制約のなかで大学の研究者の方々が求められることをすべて網羅しようとしたら、体育や芸術などが無くなってしまふでしょう。これに大きな危機感をもつわけです。中等教育を人間教育の立場からどう構築できるのか、というのがわれわれの立場です。人間としての基礎をしっかりと固めながら、中学・高校で学んだことが大学に役立つ、そういう基本方針で中等教育を追求しています。とはいえ、附属学校ですから各部局の先生方と協力しながら名大の中で新しいカリキュラムを作り、新しいスタイルを開発して、全国に向けて発信していきたいと日々考えています。

先ほど周藤先生が、あまりにも社会科は分断されすぎているから、もっと総合的なことをやらなくちゃいけないとおっしゃいましたが、それについては附属学校では総合人間科とか新教科とかをやっています。ただ、ここでは教科の立場にかえて、私の担当である歴史、特に日本史に即してお話ししてみたいと思います。

私は高校3年生や中学2年生を教えています。高校3年の受講者は24人しかいないんですけども、高校生が中学生を教えるという実践を今年初めてやりました。これはかなり面白いんです。この前の10月に第2回目をやりましたが、そのときのテーマが、最澄と空海は日本に何をもちたらか、でした。このテーマで高校3年生がいろいろやるわけです。高3にマンガの好きなのがいて、学習内容をマンガに表すわけです。おそらくいろいろなことを勉強したと思います。中2にとっては、難しい用語がいっぱい出てきますから、「加持祈祷」とか「密教」とか、そういう事項は「ひらめき日本史」とか「ライバル日本史」とかのビデオテープを流しまして、こういうおまじないをすると雨が降ってくるという画面を見せて、パッと引きつける。さらにはクイズが入ります。みかんをもってきて、このみかんは実は空海が唐からもたらしたもの、といったクイズで、それを当てたらグループにみかんをやるとかね。そういうことで大変楽しく終わったわけですが、その授業の最後に私はかならず質問タイムを設けます。高校生の先輩が授業をやるのだからどんな質問でも答えられるはずだから質問してごらん、というわけです。いろいろな質問が出てくるわけだから、高校生もさまざまな本を読んで準備せざるをえません。なかに面白い質問がありました。最澄と空海は唐に出かけたけれども、どうしてインドに行かなかったのか、玄奘は行っているわけですから、インドに行けばよかったのに、という質問です。実は中2のこの質問は歴史の本質をついているんです。本校の高校生のなかには答えられる生徒もいるわけですが、今回は残念ながら答えられませんでした。

それから、奈良仏教と平安時代の仏教はどう違うのかを説明してください、とくるわけですから、高3は冷や汗ものなんですね。3年生は3人でチームを作って授業をするわけですが、「これほど勉強したことはない、いろいろ本を読んだし、どうやったら理解してくれるかいろいろ工夫した」

「疲れた～」と言っていました。歴史の深さがある程度は徹底して調べないと歴史の面白さが伝わってこないですね。本校では高校生が中学生に教える。これは県立高校では絶対にできません。中・高校一貫だからできることです。

カリキュラムの高大連携 ところが、そのような実践を大学がどう評価するのか、実際はセンター試験の得点でボンと切られるわけですから、そうした生徒の活動が評価の対象から落ちてしまうわけですね。そのあたりを評価しようようなカリキュラムと選抜方法の改革について、大学の先生にも入ってもらって研究開発できればよいのでは、と考えます。

今私たちが求めるのは、やはり名古屋大学がどのような高校生像を求めているか、名古屋大学はこういう高校生が欲しい、そこでこういう高校教育をやってほしい、つまりはアドミッション・ポリシーをもっと明確に打ち出すべきだということです。それが非常にあいまいなのではないか、たとえば、教育学部がそれをしっかりと出したら、附属学校の教育とつながるのではないかと思うわけですね。大学が求める高校生像や高等学校像というものを、名古屋大学が自信を持って打ち出していく、それが中学・高校の新しいカリキュラムを作っていく原動力になることは間違いありません。そして附属学校が果たす役割は、そうした中高大連携の一つのモデルを全国に向けて発信するという非常に重要なものになるでしょう。少し大きなことを言い過ぎたかもしれませんが、先生方のお話で針のむしろに座らせられていますので、その針のむしろを私なりにどう解明していったらいいのかということをお簡単に述べさせていただきました。以上が私の見解です。

司会（村上） ありがとうございます。なかなか痛烈な意見だったと思います。さて、四つの提案と二つの討論で大きな流れが浮き上がってきたようです。つまり、バラバラにされた教育や離散的な知識の習得、それはそれだけで育っていくという面もあるわけだけれども、やはりそれだけでは十分ではないということですね。しかも、高大接続の一番の要である入試センター試験において、そういった離散的な知識の教育を中等教育レベルで相変わらずとり続けているのではないかと、という問題ですね。その問題を中高一貫教育の改善と、中高大連携の課題として解決していくのが我々に求められていると痛感します。時間がかかりおしておりますし、フロアにいらっしゃる方々が一家言お持ちの先生方ぞろいでありますので、フロアの方に問題を投げかけてみたいと思います。ご質問、ご意見を自由にお願ひします。〔以下、フロアとの討論は省略〕